

矢吹慶輝博士と颯田本真尼

藤  
吉  
慈  
海



矢吹慶輝（一八七九—一九三九）についての研究は最近かなりなされてゐるが、颯田本真尼（一八四五—一九二八）については、あまり知られていない。まして両者の関係やその思想信仰ないし行跡についての研究も十分であるとは言えない。両者は共に近代日本における仏教社会事業の先駆的役割を果たした人として注目されるが、この小論文においては、両者の関係について追求してみたいと思う。

## 一、颯田本真尼について

矢吹慶輝が颯田本真尼とはじめて出会ったのは、明治二八年、本真尼が山形県酒田の災害救済のため現地に出かけた途中、無能寺に立寄った時と思われる。それは矢吹慶輝が一七才のときで、東北支校に入学した翌年であるがおそらくストライキをおこして寺に帰されていた頃と思われる。本真尼はすでに五一才の尼僧として円熟していた頃のことである。本真尼は若くして出家し三年不臥の念仏をした程の人で道心堅固な尼僧であった。その本真尼が社会事業の先駆ともいふべき難民救恤の仕事に転身したのは、明治二十二年（一八八九）九月十日、十一日の三河湾一帯の台風による大風水害と海嘯による激甚な被害を受けた時である。その時の記録は『西尾市史』『吉良町誌』『一色町誌』等に詳しいが、本真尼の親戚である里野耕齋氏と矢吹慶輝博士の記録によると、古今未曾有の台風による津波のため約四百人の死者が出たといわれる。古老の話によると海嘯のため、人びとは地上に吹きあげられた魚を手づかみで拾ったという。本真尼のいた吉良町吉田伝蔵荒子にあった徳雲寺も深く浸水したが、その時四五才の本真尼は、この悲惨な光景を見るにしのびず、念仏三昧の生活から転身して、このような難民の救済をすることこそ家族をもたぬ尼僧

の使命であると感じたようである。当時、三河地方に生き仏さまのように尊敬されていた岡崎市伊賀町にある昌光律寺の志運和上は本真尼の志をよしとし、本真尼等と共に死者の回向用に走りまわり、難民の救恤に勤められたようである。ともあれ本真尼は弘化二年（一八四五）十一月二十八日、愛知県幡豆郡吉田町伝蔵荒子三五八に颯田清左衛門の長女として生まれた。幼名を「りつ」といった。颯田家はもと元禄事件で名高い吉良家にも関係のある旧家で、代々農業に従事していた。両親とも仏教の信仰が篤く、特に母親は胎教を重んじ懐妊中に三帰戒を受け、夫婦とも魚肉をさげ、五カ月間、毎日仏前で礼拝をしたという。その礼拝の時、母はお腹の中にいる子供のために、さらに続けて百遍礼拝し、どんなに忙しい日でも、一日としてこれを欠くことはなかった。本真尼の兄弟は十二人あったが、そのうち六人も出家し、生まれた子供にはみな三帰戒を授けてもらったという。

このような信仰深い家庭に育った本真尼は、幼少のころから施すことが好きで、お寺の前を通ると必ずお頭儀をするような子供であった。十才の頃、尼僧になりたいと思って両親に話したが、長女であるので許されなかった。しかし出家の志はますます堅く、普通の人と異っていたので、母親もついに尼僧になることを許した。安政三年九月一日、十二才のとき、愛知県碧海郡旭村中山の貞照院の天然和上について得度し、叔母にあたる同県幡豆郡横須賀村東城の真珠庵の本乗尼のもとで尼僧としての修道生活に入った。

さて本真尼の出家については自然法爾な動きが感ぜられるが、その背後に有名な慈本尼の感化のあったことを見逃してはならぬ。

慈本尼は徳本上人と並び称される程の尼僧で、出家する以前、颯田家で子守として働いていた。その頃その母親が悲業な死をとげたので、慈本尼は母親の追善菩提のために深夜おき出て、家の周囲をぐるぐる廻りながら二時間ぐらいお念仏を称えた。ある夜、いつものように家の周囲を廻っていると、母の姿が夢のように現われたので、とうとう

出家して加茂郡三舟に行つて修行した。この三舟における修行は厳しく、百日間床につかずお念仏したという。この百日間の不臥の念仏中に再び母の姿を感じたので、深く自得するところがあったようである。世に「慈本尼十徳」というのが伝えられているが、それは次のようなものである。

一には日中一食なり

二には昼夜不臥にて仏前にばかり坐し、別の寢所なし

三には大小便利の外、袈裟を脱がず

四には金銭を貯えず、三衣一鉢の外余物なし

五には弥陀の名号と説法の外余言を交えず

六には断食して法界の亡霊に回向す

七には在俗の時より持戒堅操の人なれば一生涯不犯の人なるべし

八には夏の夜蚊帳を用いず

九には冬の日綿入を用いず

十には肌には絹類を用いず

このような十徳が伝えられる慈本尼は在俗時代に颯田家の子守として本真尼を育てた。本真尼も出家して後は、慈本尼の弟子であり自らの叔母である本乘尼によって教えられたのである。しかしこの本乘尼も本真尼十八才の時なくなったので、報恩のため四十八夜の別時念仏を修した。この別時念仏の後、本真尼は真珠庵から自分の家の屋敷につくっていたいた小庵に移り、そこで三年の間、不臥の念仏を厳修した。この十八才から二十才までの不臥の念仏中、何か好相を感じたらしく、それから不退転の道力を得たようである。

この三年不臥の念仏を修した真の念仏者を慕って来る人も多く、妹の諦真尼をはじめ三十五・六人の弟子ができた。そこでこの草庵にも本堂が建てられた。それが今日の徳雲寺のおこりであり、当時は慈教庵と言った。そして明治十年五月から徳雲寺という寺号を公称することが許された。

この間、本真尼は文久二年正月、中山の貞照院の天然和上について律を学び、三年不臥の念仏の後、慶応元年から二年にかけて寺津村の瑞松庵にいた実英尼について浄土宗学を学び、また律の修行を積んだ。そして、明治十四年十二月、三十七才の時、妹の諦真尼とともに京都黒谷の金戒光明寺法主獅子吼親定上人について浄土宗の宗戒両脉を相承した。

加行を終えた本真尼は、その翌年七月に徳雲寺の本堂再建を發願し、翌十六年九月その竣工を見るや、久我誓円尼公を屈請して入仏式を行った。

しかし、当時の日本仏教界は実に混沌たるものがあつた。肉食妻帯勝手たるべしの布告が出ると、大隈重信を笑わせた程に、この条令のみはよく実行され、厳肅な僧風は全く地に落ちた。加うるに廢仏毀釈のあと仏法は滅尽するかと思われた。このような一般の風潮の中にあつて、僧風の刷新を叫び、「我執をのぞくには托鉢が一ばんよい」と言つて、御維新の際に禁ぜられた托鉢の解禁を政府当局に請願した高僧福田行誠の芳躰や、東京に目白教園を創設して持戒堅固な修道生活を送つていた雲照律師の高風や、当時岡崎市の昌光律師にあつて持戒堅固な生活をしていた志蓮和上等によつて三河国一帯に尊くも伝承されて来た浄土律の厳肅な僧風が、どんなにかこの若い尼僧の修道生活を淨く厳しく策励したことか想像に難くない。

かくて本真尼はますます修行を積み、明治十八年四十一才のとき貞照院の戒幢和上につき形同沙弥戒を受け、沙弥のたもつべき八戒を厳守し、その行業はいよいよ純化されて行つた。そして明治二十年九月には教師補に任ぜられ、

同二十二年には西尾町寄近の天然寺を兼務し、念仏の弘通に専念した。なおこの間に四国八十八カ所の靈蹟巡礼や西国三十三カ所の巡礼をもしている。こうした托鉢巡礼の間に世人教化の自信とすっかりした素地ができたように思われる。

しかし、このような行業純一な念仏者にもいろいろの試練があるものである。そして、この試練こそが本真尼の生涯を転換させる決定的なこととなった。

すなわち明治二十二年九月十一日、三河地方一帯を襲った台風と午後六時頃おこった大海嘯があり、三河湾に近い陸地はすっかり泥海と化し、樹木は倒れ農作物は枯れ、死傷者も多く、徳雲寺の本堂も深く水に浸った。一夜のうちに、物言わぬ骸となった百数人の遺骸の前に立って読経念仏していた本真尼は、これからその生涯を、このような難民救済に捧げようと決意したようである。これは本真尼にとって一大転換であった。念仏三昧の尼僧が一転して難民救恤の仕事に尽瘁するのであるから、これは自行から化他へ、自利から利他へ、智慧から慈悲への一大転換であった。本真尼四十五才の時のことである。<sup>④</sup>

その翌年またおこった美濃地方の六十日に亘る大震災の時は、既に志運和上の名古屋・岡崎地方の信者の方よりかねて勧募してあった衣類など二十二捆をもって現地に行き、岐阜・大垣の罹災者二千九百戸、笠松・竹ヶ鼻の罹災者千三百戸に施物を分け与えた。これから本真尼の生涯はこのような布施行の連続であった。明治二十八年五月には山形県酒田町の災害救助として私財百円、手拭・風呂敷など十八捆を罹災者千百戸へ施すため同地を訪れ、その被害の甚大なるを見て、さらに仙台―東京間を往復し救済につとめ、その年は三河へ帰ることができなかった。この年本真尼は無能寺に立寄り若き日の矢吹慶輝にはじめて対面したようである。

そしてまたその翌年の六月には、宮城・岩手・青森の三県下にわたる三陸の大海嘯に、その罹災者救恤のため、雲

照律師はじめ東京の名流婦人よりなる正法会員によって集められた衣類その他のものをもって、親しく災害地をたずね救恤につとめた。そのとき雲照律師より老尼へよせられた依頼状は、律師自筆の「六波羅蜜」の扁額とともに今日もなお徳雲寺に保存されている。

この三陸の海嘯のとき、本真尼のお供をして災害地へおもむいた祥瑞尼は、筆者が昭和十八年の夏、徳雲寺を訪ねたとき、次のようなことを話して下さった。

「老師（本真尼）は私をつれて稗や粟を食べ、行乞しながら途を急がれました。途中、牛や馬をみると、私をふりかえり、牛や馬をみたらな、おれが仏になったら救ってやるだという願をおこして、南無阿弥陀仏と申しておがみや。今生において結縁しておかないと、後になって救おうと思っても縁なき衆生は救えないことがあるなどと申されました。」

この一事をもつてしても本真尼の布施行が単なる慈善事業でなかったことがわかる。施しの結縁によって念仏者をつくり、浄土への旅の道づれを一人でも多くつくろうというのが、その生涯の念願であった。

このような施しの行脚が、明治二十四年の美濃の震災から大正十三年の藤沢町震災救恤まで三十四年間、たゆみなく続けられた。その足跡は全国二十三県百五十余カ町村にわたり、施物を施した戸数が六万余、勸化結縁した家が十万余戸に及んだといわれる。北は北海道から、青森・岩手・秋田・山形・宮城・福島の大県に及び、長野・神奈川・静岡・愛知・岐阜・三重の大県、北陸地方では新潟・福井の二県、中国筋では兵庫・鳥取・広島・島根の四県、四国・九州では徳島・佐賀・鹿児島の大県にわたって親しく災害地を訪れ救恤につとめている。この三十四年間に施しの行脚のなかったのは明治二十六、七年の二年だけで、他は明けても暮れても地震・津波・洪水・火災など、いやしくも人のこまっている噂を聞くと、すぐに施物をもって飛び出して行くのが常であった。

そのうち特に災害の範囲や被害の程度から、大きな施しのあったのは、明治二十四年の美濃の震災、同二十八年の酒田の災害、その翌年の三陸の津波、同十四年の函館の大火、同十三年の青森の大火、大正三年の桜島の噴火の時などである。その施与の梱数も、多いときには二百七十余梱に達している。本真尼の晩年、とくにその病臥前の七、八年間は施しのために席のあたたまるひまがなかった程である。すなわち大正六年には三月に三重県の阿漕、四月に秋田県の能代、七月に新潟県の黒糸、出雲崎、上川西、十月に青森県大鰐村、十二月に弘前市と引続きおこった大火のあとを、矢つぎばやに廻った。このようにして大正七年に六回、同十二年に四回、同十三年に一回、顕著なものだけでも前後総計七十余回に及んでいる。これらの布施行は、本真尼のやむにやまれぬ慈悲心からなされたもので、他人から頼まれてできることではなかった。

しかもこの小柄な本真尼の人間わざとも思えない大布施行は、とりたてて言うべき背景もなく、ただ心から心への信者のまごころとお弟子たちの随喜の行とによって、三十余年間うまずたゆまず行われた。五万余戸に及ぶ大布施行が、か弱い尼僧の手でなされたということは、向後は知らずおそらく前代未聞の事である。<sup>⑤</sup>

## 二、颯田本真尼と矢吹慶輝博士との出合

すでに先にも触れたが、日本における社会事業の先駆者の一人、矢吹慶輝博士が、本真尼とはじめて出合ったのは、本真尼が明治二八年五月二一日山形県酒田町の災害救恤のため、私財百円、手拭、風呂敷など三河、美濃、東京の篤志者より寄付されたもの十八梱をもって罹災者千百戸に施こしに行く途中、無能寺に立寄った時のようである。矢吹博士は無能上人の後を嗣がれた矢吹良慶和上（一八三〇—一九〇六）のお弟子で、福島県桑折町（こぼり）にある無能寺に入山したのが七才のときである。良慶和上は二百五十戒をたもった持戒堅固な律僧で、本真尼も大変和上を尊敬し、

無能寺には施行の途次よく参詣したようである。それで矢吹博士も学生の頃から本真尼のところへ来られて親しくしていられたようである。ところが、博士も良慶和上の養嗣となりその後継者と目されていたが、良慶和上遷化の後、無能寺の後継問題で心労が多く、本真尼にもそのことを相談されたようである。本真尼は矢吹博士より三十四才年長なので、十七・八才頃、五十一・二才の本真尼に出合った矢吹博士は、この純粋な尼僧に傾倒されたであろうと思われる。そんなことで博士もその後よく鶴沼へ行かれ本真尼の教えを聞かれたが、矢吹博士が仏教学や宗教学をやり、さらに社会事業に興味を持たれたのも本真尼の影響によるように思われる。博士は無能寺の後継者となることを断念し、結婚してりっぱな仏教学者となり『三階教之研究』で学士院恩賜賞を受け『阿弥陀仏の研究』や『鳴沙余韻』を出版し、さらに欧米の社会事業調査等もなし、大正大学に社会事業研究室をつくって後進の指導にあたった。博士は「私など僧侶の資格はない」と言って、自ら進んで鶴沼慈教庵（後の本真寺）の信徒総代をしていられたそうである。博士が本真尼を敬慕される気持は、その著『本真老尼』によってもうかがえるが、博士はさらに詳細な本真尼の生涯を書くつもりでいられたようである。しかし、その仕事を完成せずして浄土へ帰られたのである。故大島徹水大僧正の依頼で筆者が『布施行者颯田本真尼』を非売品として出版したのは昭和二十六年一月のことであった。文章も調わずおもしろいものであったが、この本を大島徹水大僧正と矢吹慶輝博士に捧げた次第である。その後、春秋社から改訂増補して『布施の行者颯田本真尼』として再出版したのは昭和四十五年八月十日のことである。

思わず私事に亘ってしまったが、矢吹博士は『三階教之研究』の出版についてその序文に次のような感懐を述べていられる。

「十月二十三日午后二時、本自叙並に巻末の後記を浄書し了る。乃ち先づ春來病床に在りし妻に此の旨を報じ、相共に本稿完結の喜を頌ちしが、凶らざりき、此の夕、妻の病遽に革まり、廿四日午前零時三十七分、偶地藏祭日

に当り、溘焉として逝く。成書近きに在りて忽ち這の眼前の無常に接し、熟、十有余年の既往を回顧して著者の胸中実に感慨無量なるものあり。同月廿九日、忘妻の葬儀を小石川の伝通院に挙ぐるや、三十年来の著者が竹馬の友、小野鉞造博士の弔辞に曰く、著者の今日あるは其の半は亡妻内援の力なりと。斯くて本書は又著者にとりて、長へに此の隠れたる内助者の長逝を記念するものとなれり。想はざりき、製本成るの日、本書が偶、亡妻永劫の記念たらんとは、今、野外の秋色漸く深くして、学窓、哀情転た切なるものあり。併せて叙末に附記す。

大正十五年十一月十三日遺骨の側にて

著者又識

学士院恩賜賞に輝く『三階教之研究』が矢吹博士にとって右のような哀情を伴うものであったことを感慨深く思う。

博士はその翌年慈教慶に泉谷氏と共に発起となり地蔵尊の銅像を建立し、十一月六日開眼供養をなし、奥様の遺骨をその地藏尊の銅像の下に納骨された。本真尼が遷化したのは、その翌年昭和三年八月八日の夜十二時で、八十四年の生涯であった。その時、博士は五〇才である。

### 三、浄土教者の社会事業

矢吹博士が社会事業に関心を持ち出したのは、矢吹良慶について七才のとき、得度したときからはじまるという芹川博通氏の指摘は正しい。七才の少年が出家して律院生活に入るといふことは、子供ながら何等か世のため人のためにつくしたいとの念願があったに違いない。師の良慶和上は高德な律僧で、識見卓越、円満な人柄で、子女への経済的援助も多く、慈善事業にも熱心な人であったといふ。<sup>⑦</sup> 独身生活をした律僧なれば、多くの青少年を支援し教化を

たれることも可能で、家族を持つ一般の僧侶のなし得ないことが比較的にたやすくできる。戒律生活と慈善事業との結びつきはそのような点にある。三陸の津波の時なした本真尼の献身的救恤活動に感動したであろう若き日の矢吹博士は、僧尼の戒律尊重のあり方に心ひかれたに相異なる。戒律を持して独身生活をなし、このような難民救恤にあたることこそが現代の僧尼のなすべきことであると考へたでもあろう。ともあれ二十才のとき明治三十一年六月東北支校といわれた浄土宗学専常科を卒業し、同年九月東京小石川にあった浄土宗学高等学院高等正科に入学し、明治三十五年七月同校を卒業している。博士二四才の時である。それから東京帝国大学に入学するため同年九月中学都文館第五年生に編入学し、翌年七月第一高等学校に入学している。博士二五才の時である。矢吹博士は明治二十一年六月七日矢吹良慶和上の養子となり、その後継者となったが、明治三十二年八月八日協議離縁して佐藤姓に復帰している。しかし明治三十九年九月一四日良慶和上が遷化されたので、博士は明治四〇年一月二五日矢吹良慶の選定家督相続人となり矢吹姓をまた名のっている。矢吹博士は明治三十九年七月第一高等学校を卒業し、同年九月東京帝国大学文科大学に進学した。博士二八才のときである。そして明治四二年七月東京帝国大学文科哲学科を卒業し、その時の卒業論文が「阿弥陀仏の研究」である。これは後になって刊行されるが、今日さらに復刻されるほどに価値あるものである。大正二年八月まで同大学院に在籍したが、その間、明治四二年九月天台宗大学講師をつとめ、明治四三年四月宗教大学教授となり、大正二年姉崎正治に随って渡米。同四年浄土宗外国留学生としてハーバート大学およびマンチェスター大学に学び、社会事業を視察し、欧州では敦煌古写本等を調査し六年一月帰国している。

外国における社会事業の盛んなるを見るにつけ、浄土教者であり戒律を重視する立場にあった若き日の博士は、戒律については新しい見解を持っていたようであるが、戒を持つ者こそ社会事業に従事すべきであると感じていたようである。帰国後は戒律の大切なことを感じつつも寺院の住職として仏道を行ずるより学問の世界において活躍し、

仏教社会事業の研究に尽瘁することの重要性を自覚したようである。博士が結婚生活に踏み切ったのも、そのような自覚の下になされたことで、その内助の下に学問の世界に没頭することができた。宗教学に社会事業科を設け後進の指導をし、三輪学院を創設して勤労青少年の教育に献身したことも、震災後の東京の復興のために東大助教授の職を辞して社会局長の勤めに献身したのも彼の実践的欲求の然らしめるところであったといえよう。そのような判断の背後に本真尼の無心な社会救済活動のあったことも考えられる。

元来、浄土教というものは、厭離穢土・欣求浄土を基本とする、現世よりいわば未来の浄土往生を期する宗教である。現世の幸福よりも来世の幸福を願い、現世は穢土であり仮りの宿であると考え、そのような穢土を厭い離れて来世の浄土へ往生することを期待する教であった。鎌倉初期の源平動乱の時代に生きた法然（一一三三—一二二二）は、現世の穢土性をまざまざと見せつけられた人である。その乱世にあって平和に道を求めることは容易でなく、現世において悟を開くことはできなかった。そのような時代に一般民衆を救いうる宗教は厳しい修道生活ではなく、誰れにでも実践できる教えでなければならなかった。法然が四三才まで苦んだのは、その教えを発見するためであった。法然の父漆間時国も明石源内武者定明によって重傷を負わされ、やがて死んで行った。その時の遺言は意外にも仇を討つことではなく、出家して菩提を用えることであった。父の遺言忘れがたく母と別れて一三才（一説一五才）で比叡山に登り、ひたすら道を求めて勉強と修行にはげんだ法然房源空は、一時山を下って南都や醍醐の碩学を訪ねて聞法したが、解脱の道は教えられなかった。比叡山に帰った法然はひたすら聖典を読み、自ら思索して、すべての人の救われる道を探求した。そして四三才の時、善導の観経疏を読み、自らの救われる道を見出し、一人、男泣きに泣きながら南無阿弥陀仏と称えて、凡夫救済の道の発見を喜び、山を下って専修念仏の教えを説いた。この教えなら万機普益すなわち、どんな人でも平等に救われるという自信を持つにいたったからである。

この口称念仏の教えは当時の人心に投じ、またたく間に「一天四海みな法然が弟子となる」（選時抄）と日蓮聖人をして言わしめたほどに、津々浦々にまで広まった。浄土教という宗教はそのような教えであった。現世においては念仏の功を積み、宗教的慧智を得て人生を安らかに全うし、死後は極楽浄土に往生することを期する教えである。このような教えから現世における災害による難民を救済するような働きが出てくるかどうか。仏教とは智慧と慈悲の教であるとしても、当時の浄土教者は慈悲とは阿弥陀仏の慈悲であり、これをありがたく受けとるだけで、自ら慈悲を行ずるといふようなことはあまり強調されていなかったようである。したがって浄土教者はたとえ悪人であっても念仏すれば阿弥陀仏の他力本願によって救われるというような信仰が普及していて、どうかすると人間を悪に導くように誤解されさえした。僧侶も本願ばかりというように、弥陀の本願は絶対だから、どんな悪人でも救ってくださると信じ、悪をやめ善を修することすら、自力のほからいであり、人間の力みにすぎぬと理解されていた。このような浄土教から難民救済をするというようにも、それは「末通らざる慈悲」<sup>⑤</sup>だと批判されるにいたった。

浄土教者は墮落したと言われるのも、そのような他力救済の教えに甘えて、慈悲行を実践することを否定し、道徳的生活をすることすら自力作善と批判したからである。そのような中において僅かに浄土律を奉ずる僧尼のみは、そのような墮落した浄土教者への反省を促す生き方であったとも言えよう。本真尼が浄土律の尼僧として清浄な修道生活を書き、布施行という慈悲行を実践したのも、本真尼にとっては当然の成り行きであった。そのような布施行に対し、これを支持したのは、雲照律師、志運和上等、日本仏教界最右派の律僧たちであった。雲照律師は真言律、志運和上は浄土律の人で高徳の誉高くその信者たちが本真尼の布施行を支持したわけである。したがって浄土教者としては珍らしいケースであるが、本真尼の布施行が浄土律の僧尼によって支持されたことは注目すべきことである。

矢吹博士の社会事業への関心も、博士が福島県桑折町の無能寺という浄土律の寺に青少年時代をすごしたことに基

困する。律院であり律僧であれば、扶養すべき家族はなく、救うべきものは難民であり、困窮している人びとであった。したがって、そこから布施行が実践されるのは当然なことであって、若き日の矢吹博士が、良慶和上を師として感化を受け、この布施の行者颯田本真尼に絶対の信頼をおき、その讃仰者となったのも当然のことであった。

## む す び

簡単に矢吹博士と本真尼の關係につき論述し、浄土律と布施行の關係につき考えて見た。十分に意をつくしていないが、本真尼の念仏三昧の生活から出て来た布施行への転身のあざやかさ、そして、その布施行がやはり念仏弘通に通ずるものであったこと、浄土律や真言律の人びとが布施行によって僧尼の対社会的な役割を果さんとしたこと等につき考えて見た。しかしながら浄土教と布施行というか社会福祉事業との關係については宗教的にもっとしっかりした教理的基礎づけがなされねばならぬであろう。

## 注

- ① 芹川博通「矢吹慶輝の社会事業思想」(長谷川仏教文化研究所研究年報第八号特集近代仏教と社会福祉) 拙稿「矢吹慶輝の浄土教理解」(花園大学研究紀要一一号、一九八〇)。拙稿「矢吹慶輝について」(仏教史学研究二三卷一一昭和五十六年一月)
- ② 拙著『布施の行者颯田本真尼』春秋社刊。『西尾市史』五七三頁—五九一頁。『吉良町誌』二五六頁—二九八頁。『一色町誌』五二九頁—五三一頁。
- ③ 出口英二「日本の近代化と宗教問題」(『近代日本と早稲田大学の思想群像 I』早稲田出版部) 参照
- ④ 拙著『布施の行者颯田本真尼』の年表は『西尾市史』や『吉良町誌』等により三河地方大海嘯の年を明治二十二年に訂正しなければならぬ。
- ⑤ 矢吹慶輝「社会救济事業の先驅をなした老尼僧の生涯」(いつも世に隠れて奉仕の為に尽した本真尼の八十年の生涯) 『主婦之友』(新年特別号) 大正一四年一月。矢吹慶輝『本真老尼』慈教庵、昭和一〇年。拙著『布施の行者颯田本真尼』華頂文社、昭和

- 二十六年。吉田久一『日本近代仏教社会事業史研究』吉川弘文館、昭和三十九年、二六四―二六五頁。拙著『布施の行者颯田本真尼』春秋社、昭和四十五年、林千代「颯田本真尼」『社会事業に生きた女性たち』ロメス出版、昭和四十八年。
- ⑥ 芹川博通「矢吹慶輝の社会事業思想」一頁。
- ⑦ 拙稿「矢吹慶輝について」(『仏教史学』第二十三卷第一号)
- ⑧ この件については拙稿「矢吹慶輝について」(『仏教史学』第二三卷一号)一一二頁参照。
- ⑨ 歎異抄



矢吹博士や本真尼と  
親しかった大島徹水大僧正



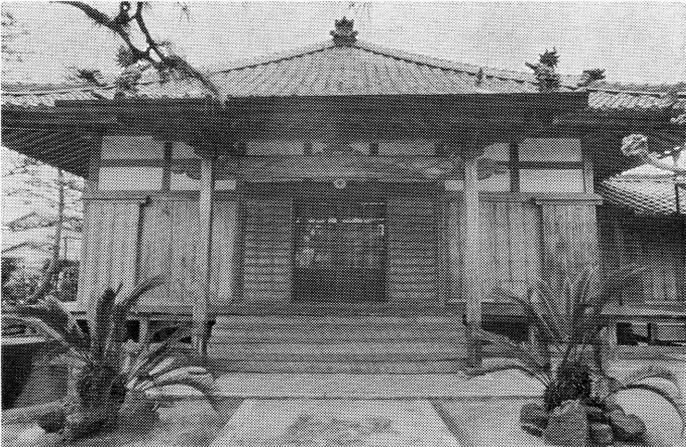
矢吹慶輝博士



颯  
田  
本  
真  
尼



本真・諦真兩尼の墓のある京都市右京区鳴滝町泉谷にある西寿寺



本真尼のいた愛知県吉良町吉田にある徳雲寺